



四川大地震救出本格化

中国、四川大地震は発生から3日目の14日、武装警察の救助隊がようやく震源地に入るなど救出活動が本格化してきた。当局が被災地に動員した軍や警察は計10万人。共産党と中国政府にとって、2万6000人以上とみられる生き埋め被災者の救出が「最大の任務」(温家宝首相)だ。海外からの人的支援が実現しないまま、生き埋めになった人の生存率が低くなる「発生から72時間」が刻々と迫っている。

【洛水(中国四川省) 鈴木玲子、成沢健一、花岡洋二、大谷麻由美】

中国自力に固執

「72時間」目前難航

【13日未明、四川省都江堰市。暗闇の中で苦しむ被災者は、ライトが近づいてくるのを見た。軍の機関紙「解放軍報」は14日付の1面で、軍や武装警察などで構成する特別救助チームが、赤外線や音波による生命探査機器のほか救助犬も駆使し、校舎の倒壊現場から約20人を救出した様子を伝えた。

14日、天井や壁が崩壊した無残な姿で山の斜面に残る四川省汶川県の家屋。新華社A.P.

だが、こうした事例は限られており、雨による二次災害の危険や機器類の不調による救助作業の難航も報告されている。

さらに、山間部の被災地では交通遮断の影響で救助隊の到着が遅れ、救出活動は住民らによる手作業に近い。

膨らみ続ける犠牲者の数に、中国のインターネット上では海外の救助隊受け入れを求める声も目立つ。

民政部は13日、海外からの資金や物資の受け入れを表明する一方、人的援助の申し出

膨らみ続ける犠牲者の数に、中国のインターネット上では海外の救助隊受け入れを求める声も目立つ。

膨らみ続ける犠牲者の数に、中国のインターネット上では海外の救助隊受け入れを求める声も目立つ。

膨らみ続ける犠牲者の数に、中国のインターネット上では海外の救助隊受け入れを求める声も目立つ。

については謝意を示しながらも、「被災地に入るのが非常に困難」との理由で難色を示した。日中外交筋は「被害が相当深刻な場所では、最後まで国際社会の目に触れさせない可能性もある」と指摘する。

中央テレビは日本や米国からの人的援助の専門家も現地に入れ

3時半ごろが、その「一刻限」に当たる。72時間は、孤独感による気力の低下や脱水症状の限界と考えられている。

消防庁参事官室が「救助活動が到着できる目安」とし、多くの自治体で「3日分の食料備蓄」と呼びかけている。

東京工業大学の和田章教授(耐震工学)は、これまでに見た現場の写真・映像や、過去に中国で建設現場を見た経験などから、「中層建築も積み木細工のようで、耐震性が低い」と分析する。



違法建築横行指摘も

崩壊した校舎の下敷きになり、教室にいた児童5人が死亡した重

合間から、さほど太くない鉄筋がむき出しになった。また、

中国では耐震強度不足だけでなく、手抜き工事による事故も数多く報告されている。

「効率的な簡単な建て方」だが、壁は建物の強度の役に立たず簡単に崩れる。床も強い揺れでバラバラの板になり、はりから落ちた。和田教授はこの構造が犠牲者の増えた要因とみている。

中国では耐震強度不足だけでなく、手抜き工事による事故も数多く報告されている。セメントなどの建設資材に劣悪品や偽物を使